

(7) ——— いつも同じ描方をする子どももの行動特性について ———

第(6)研究報告において幼児を対象にかかせた場合各回数間の指絵に必ずしも同じ傾向がみられず、したがって一枚の絵のみで人格診断の資料とすることにはかなり危険があることがわかった。しかしこれを個別的にみると各項目について同じ傾向を示す子どもとそうでない子どもがみられる。これがどのような要因によるかを明らかにするため、まずわれわれは両群の子どもを選び出し(四回の描写を通じ四回とも同じ傾向を示す子どもをA群、そうでない子どもをB群)その行動特性と知能の差を検討した。

**調査方法** 手続は第(6)報告に準じたが幼児の行動特性はF・C・B・Sによった。両群の行動特性得点をu検定し明意差の認められるものは次の通りである。

A群がB群に比し好奇心(内容がわかる)、恐怖心(実物に近い色の使用)、社会的内同性(線の長さ)、興奮性(紫色使用)、従順さ(紫色使用)において高く、攻撃性(実物に近い色使用)(線の長さ)快活さ(実物に近い色使用)、空想(実物に近い色使用)、友情(実物に近い色使用)、諧謔性(実物に近い色使用)、活動性(全面使用)、愛情の深さ(黒色使用)がB群よりも低い。

I・Qでは両群に有意な差は認められない。

以上要約すると、常に同じ傾向を示さぬ群の方が快活で心もやさしいようであり、同傾向に偏っているものは問題を持つ性格のようと思われる。I・Qには大差は認められなかった。

問題点として描画項目を分析的に検討したため個々に子どもがか

わっていること、A群の中には正反対の立場のものも含まれていることなど更に検討の余地がある。

## 幼児の家族描画

Hulse W. の Draw-Your-Family

幼年教育研究所

法の検討 ———  
守屋光雄  
釘宮 冴子

目的 心研第二九巻第四号の深田氏による、「学童の家族描画」の研究を幼児に試み、主として発達の観点から学童の場合と比較検討し、あわせて、家庭における親のしつけの類型との関係をもみようとした。

被験児 幼年教育研究所付属幼稚園児八四名(男四〇、女四四)

指示 「その紙にあな たの家の人をかきなさい。あなたもかくのですよ」

結果 次の表およびプリント参照のこと。

[Table 3] 人物の描かれた順序

	男		女		性	差	
	N	%	N	%			
始	父	6	15.0	4	9.1	0.69	.50>p
	母	16	40.0	10	22.8	1.35	.30>p
	本人	3	7.5	17	38.6	9.59	.01>p
	他	15	37.5	13	29.6	0.05	.95>p
終	父	7	17.5	9	20.5	0.11	.95>p
	母	7	17.5	13	29.6	1.68	.20>p
	本人	16	40.0	5	11.3	9.16	.01>p
	他	10	25.0	17	38.6	1.61	.30>p